

新課程セ試“2年目のジंकス”的中 セ試平均点は、文・理系型とも大幅ダウン！

5(6)教科7科目平均点(900満点/加重平均)；

文系型 525.1点(-39.2点)

理系型 529.7点(-42.5点)

基幹科目の国語、数学ダウン、英語前年並み。

旺文社 教育情報センター 19年2月

新課程2年目となる19年センター試験は志願者55万3,352人(前年比0.4%増)、受験者51万1,272人(同1.0%増)で、ともに4年ぶりの増加の中で実施された。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、国公立大センター試験の文系及び理系の標準型<5(6)教科7科目;900点満点>の加重平均点を旺文社で算出した結果、文系型525.1点、理系型529.7点で、ともに大幅ダウン。新課程セ試“2年目のジंकス”が的中した形だ。

過去のデータも含め、センター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

文系型・理系型の「5(6)教科7科目」平均点

国公立大のセンター試験(以下、セ試)科目は、国立大を中心に5(6)教科7科目(900点満点)が主体となっている。標準的な受験科目の編成としては、次の2タイプである。

文系標準型(900点満点) = 国語 + 地歴 + 公民 + 数学2科目 + 理科1科目 + 外国語

理系標準型(900点満点) = 国語 + 地歴・公民から1科目 + 数学2科目 + 理科2科目 + 外国語

このため、各科目の平均点と受験者数から割り出す全体の平均点(加重平均)も、文系型と理系型とに分けて算出した。英語は「筆記+リスニング」の得点率を基に200点満点に換算。

文系標準型平均点 = 525.1点(前年より39.2点ダウン)

理系標準型平均点 = 529.7点(同、42.5点ダウン)

ここでの文系型、理系型の平均点は、私立大型を含む全受験者の加重平均を集計したものである。また、特に理系志望者は、平均点がダウンした物理Ⅰ、化学Ⅰ、地理Bなどの選択が文系志望者より多いと想定される。そのため、対前年のダウン幅は、実際の理系志望者においてはこれよりやや大きいと見られる。

英語は前年高得点のリスニングテスト(以下、リスニング)が3.8点ダウンしたが、筆記が3.6点アップし、「筆記+リスニング」は0.2点ダウンでほぼ前年並み。英語の他は、国語(前年との差。以下、同。-15.5点)、物理Ⅰ(-9.0点)、数学Ⅱ・B(-8.8点)、数学Ⅰ・A(-8.3点)、現代社会(-7.6点)、地理B(-6.7点)、化学Ⅰ(-2.7点)、生物Ⅰ(-2.6点)など、理系科目が軒並みダウンしている中、日本史B(+12.3点)、政治・経済(+3.3点)、世界史B(+1.5点)などの文系科目のアップが目立つ。

平成19年度大学入試センター試験(最終集計)平均点一覧

<平成19年2月7日 大学入試センター発表>

教科名	科目名	平成19年(最終)		平成18年(最終)		平均点の 対前年差	受験生数の 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
文系標準型平均点(900点満点)			525.1	—	564.3	▲ 39.2		
理系標準型平均点(900点満点)			529.7	—	572.2	▲ 42.5		
国語(200点)	国語	487,424	110.0	482,808	125.5	▲ 15.5	4,616	
地理歴史 (100点)	世界史A	2,120	47.4	1,524	44.9	2.5	596	
	世界史B	91,619	67.8	90,209	66.3	1.5	1,410	
	日本史A	4,176	51.5	4,835	57.6	▲ 6.1	▲ 659	
	日本史B	147,333	67.0	144,959	54.7	12.3	2,374	
	地理A	6,818	53.9	6,383	62.7	▲ 8.8	435	
	地理B	108,798	58.4	110,948	65.1	▲ 6.7	▲ 2,150	
公民 (100点)	現代社会	207,907	50.3	220,731	57.9	▲ 7.6	▲ 12,824	
	倫理	44,442	69.7	43,643	68.7	1.0	799	
	政治・経済	70,043	64.4	62,961	61.1	3.3	7,082	
数 学	数学 (100点)	数学	15,308	44.1	14,004	54.3	▲ 10.2	1,304
		数学・A	353,545	54.1	356,035	62.4	▲ 8.3	▲ 2,490
	数学 (100点)	数学	11,419	30.7	12,187	35.7	▲ 5.0	▲ 768
		数学・B	316,968	48.9	317,357	57.7	▲ 8.8	▲ 389
		工業数理基礎	81	67.0	86	59.2	7.8	▲ 5
		簿記・会計	1,259	53.4	1,071	56.6	▲ 3.2	188
情報関係基礎	595	62.1	554	59.6	2.5	41		
理 科	理科 (100点)	理科総合B	19,345	62.4	17,375	66.7	▲ 4.3	1,970
		生物	180,010	67.0	177,901	69.6	▲ 2.6	2,109
	理科 (100点)	理科総合A	38,799	57.1	35,244	65.8	▲ 8.7	3,555
		化学	200,001	61.4	197,974	64.1	▲ 2.7	2,027
	理科 (100点)	物理	141,274	64.4	139,620	73.4	▲ 9.0	1,654
地学	27,561	62.4	26,111	59.3	3.1	1,450		
外 国 語 (200点)	英 語	筆記(200点)	503,823	131.1	499,630	127.5	3.6	4,193
		リスニング(50点)	497,530	32.5	492,555	36.3	▲ 3.8	4975
		筆記+リス(200点)		130.8		131.0	▲ 0.2	—
	ドイツ語	125	142.6	106	155.9	▲ 13.3	19	
	フランス語	158	141.1	141	134.6	6.5	17	
	中国語	485	164.2	397	170.6	▲ 6.4	88	
	韓国語	186	147.6	189	155.3	▲ 7.7	▲ 3	

<注> 文系標準型平均点(900点満点)は、国語(200点)、地歴と公民2科目受験(200点)、数学と数学の2科目受験(200点)、理科(、、合わせて集計100点)、外国語(200点;英語は筆記<200点>+リスニング<50点>の得点率を基に200点満点に換算)の加重平均点。

理系標準型平均点(900点満点)は、上記文系型の地歴と公民を合わせ(1教科として集計100点)、理科を2科目(2科目受験組及び3科目受験組における平均点の高得点2科目から算出した200点)とする5教科7科目の加重平均点。

文系・理系とも、大学入試センター発表の科目別平均点(小数第2位まで)と受験者数をもとに旺文社が算出(小数第1位まで)。

5教科6科目(文系・理系共通の800点満点を900点満点に換算)の加重平均点は、25年より41.8点のダウン。

得点調整は、対象科目間の平均点差の最大が「倫理 - 現代社会」= 19.4点で、20点差以内に収まり、実施されなかった。

18年は、旧課程履修者に対する経過措置のデータを除外してある。

5教科6科目(文・理系型共通)平均点の推移

過去の文・理系型共通の5教科6科目の平均点(加重平均点、800点満点)と比較するため、19年の「5教科6科目」平均点を算出した。

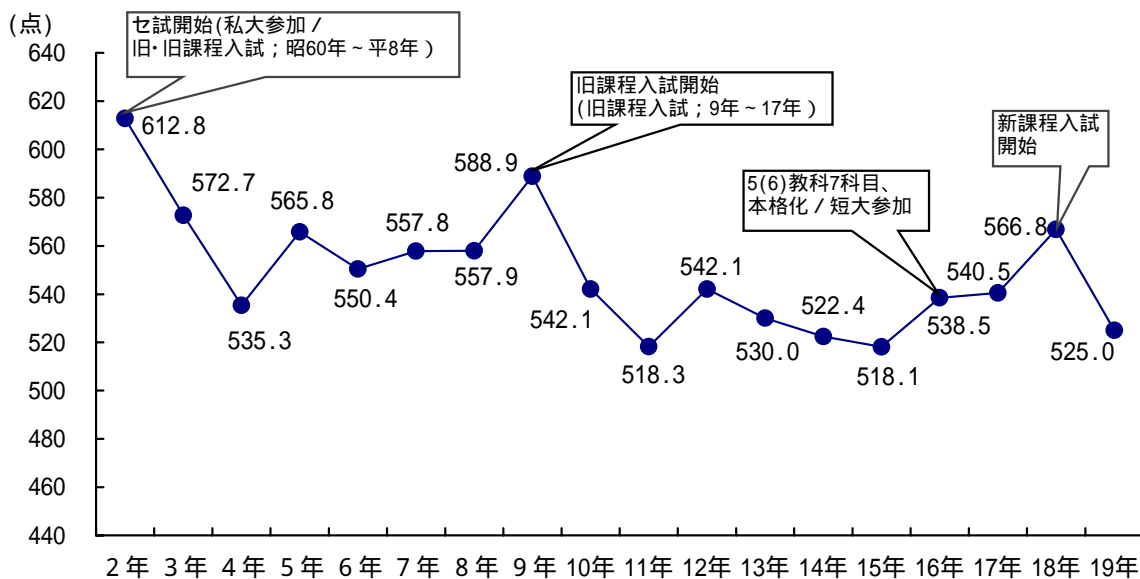
結果は900点満点換算(以下、同)で525.0点となり、前年より41.8点ダウンした。平成2(1990)年のセ試開始から、19年までの5教科6科目平均点の推移を下図に示した。

4年(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)は英語、数学Ⅱ、物理などのダウンで、平均点は前年より37.4点ダウンした。9年は旧課程入試の始まった年で、数学Ⅰ・A、数学Ⅱ・B、英語のアップで平均点は、8年より31.0点アップした。10・11年とも、国語Ⅰ・Ⅱ、数学Ⅰ・A、英語などのダウンで、特に11年の平均点は518.3点(得点率57.6%)まで低下した。14年は物理ⅠB、数学Ⅱ・Bの大幅ダウン、国語Ⅰ・Ⅱの大幅アップで、「文高理低」となり、平均点は522.4点。15年は、英語の大幅アップに対し、国語Ⅰ・Ⅱと数学Ⅱ・Bが大幅にダウン。結局、基幹3科目のアップ・ダウンが相殺する形となったが、平均点は518.1点で史上最低を記録。16年は国立大を中心に5(6)教科7科目が本格化し、国語Ⅰ・Ⅱ、数学Ⅰ・Aなど、基幹3科目のアップが全体の平均点を大きく押し上げた。旧課程入試最後の17年は、英語がダウンしたものの、国語Ⅰ・Ⅱ、数学Ⅱ・Bのアップに加え、数学Ⅰ・Aが小幅なダウンに留まったこと、受験者の多い選択科目の日本史Bや地理B、現代社会、化学ⅠBなどがアップしたこと、前年より2.0点アップした。新課程入試初年度の18年は、英語、国語、数学Ⅱ・Bなどのアップで前年より26.3点アップの566.8点の高得点となった。

19年は前述のように基幹科目の国語、数学Ⅰ・A、数学Ⅱ・Bをはじめ、一部の文系科目を除き軒並みダウンし、前年より41.8点の大幅なダウンとなった。

制度改革や教育課程の改訂に伴う出題科目や内容等の変更時の試験は、これまでいずれも平均点アップ、翌年はダウンといった“ジンクス”が見られたが、18年、19年も同様の結果となった。

センター試験(本試)5教科6科目加重平均点(文・理系型共通;900点満点に換算)の推移



注) 大学入試センター発表の科目別平均点と受験者数から、5教科6科目(地歴・公民合わせて100点、理科1科目として100点<文・理系型共通>の800点満点)の加重平均点を旺文社が算出。16年からの5(6)教科7科目(900点満点)に合わせ、900点満点に換算。18年は「経過措置」科目のデータを除外してある。

英語：筆記 3.6 点アップ、リスニング 3.8 点ダウンで、「筆記+リスニング」は前年並み

実施 2 年目のリスニングは、一般入試において、国立大 98%、公立大 92%、私立大 64% でそれぞれ合否判定に利用(筆記とリスニングの得点次第ではリスニング不採用の場合も含む)される。こうした状況の下、リスニング受験者は 49 万 7,530 人(本試)で、受験率(リスニング受験者数/全受験者数、本試×100)は 97.3%と、前年と同じだった。

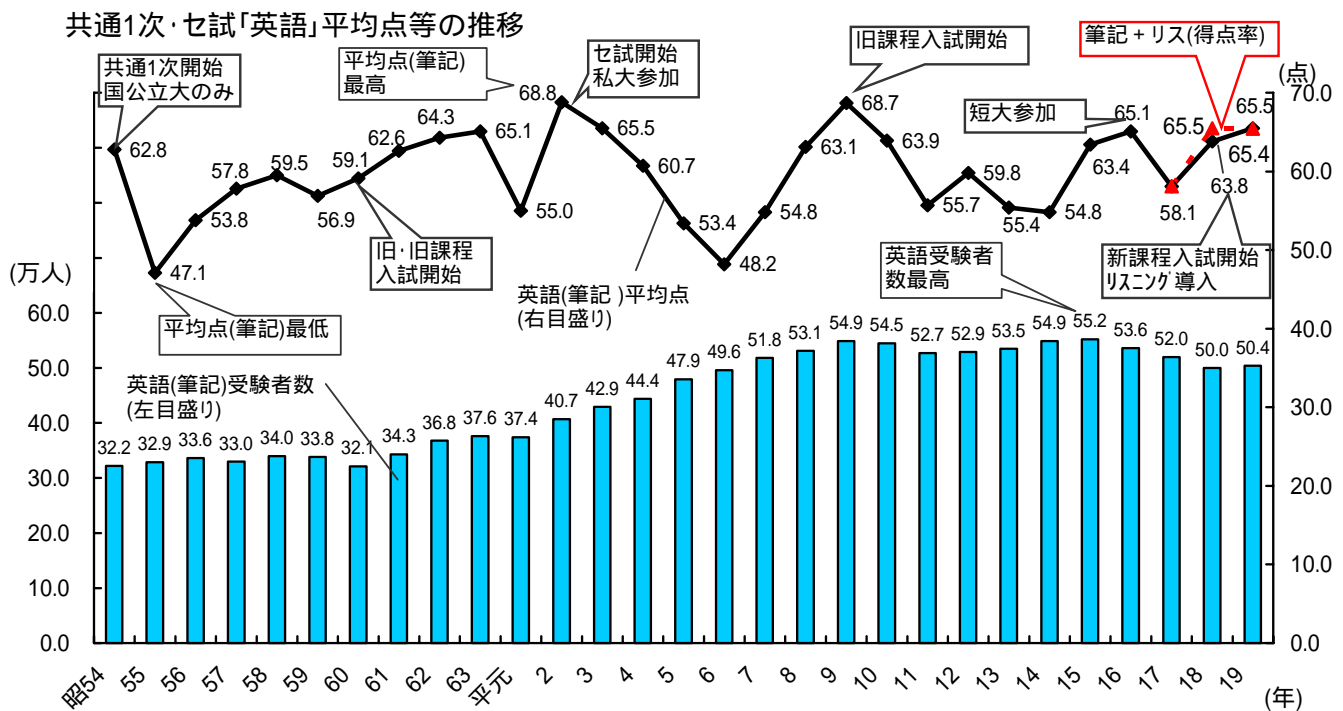
初実施となった 18 年のリスニングは、平均点 36.3 点(得点率 72.6%)と高得点であったが、19 年は 3.8 点ダウンの 32.5 点(同 65.0%)に下がった。形式・内容・問題量はほぼ前年を踏襲しているが、読み上げ速度が速まったところもあった。

一方、筆記は出題形式が大幅に変わり、総語数の大幅増に加え、問題数もやや増えたが、平易な問題も多く、平均点は前年より 3.6 点アップの 131.1 点(得点率 65.5%)。結局、「筆記+リスニング」の得点率は 65.4% (旺文社算出; 前年比-0.1 ポイント) で、200 点満点換算で 130.8 点(前年より-0.2 点)と、ほぼ前年並みであった。

1 月 20 日(本試)のリスニングでは、IC プレーヤーの不具合などから 381 人が同日、リスニング終了後に別の機器で「再開テスト」を受けた。また、これとは別に当初の「再開テスト」対象者も含め、16 人が 1 月 27 日(追・再試験)に「再試験」を受けている。

ところで、英語(筆記)は例年、ほぼ全てのセ試受験者が受験する(19 年受験率 98.6%) ため、その平均点のアップ、ダウンは文・理系型共通の 5 教科 6 科目の加重平均点のアップ、ダウンとほぼ重なる(下図と P.3 のグラフを比較参照)。

ただ、19 年は筆記とリスニングが相殺した形でほぼ前年並みとなり、「新課程 2 年目のジंकス」は顕著に現れなかった。



注 . 各年とも、「筆記」(200 点満点を 100 点満点に換算)の平均点を実線で、受験者数を棒グラフで表示。18・19 年は「筆記+リスニング」の得点率(18 年 65.5%、19 年 65.4%)を破線で表示。

国語; 平均点、15.5点の大幅ダウンで、再び得点率“5割台半ば”へ急落

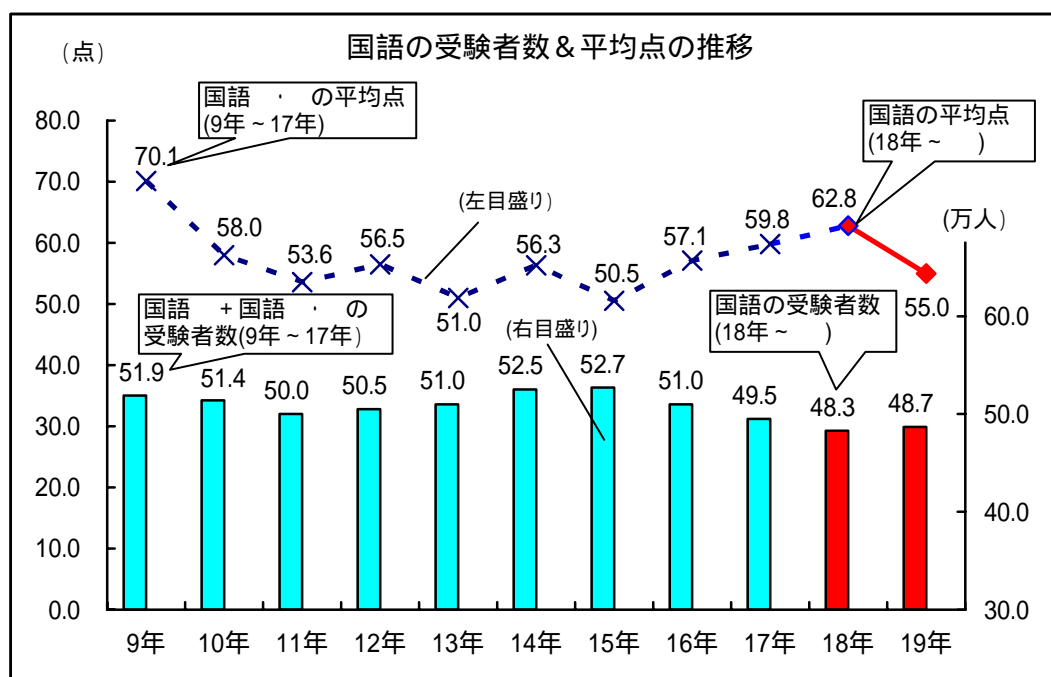
英語に次いで受験者の多い国語(19年受験率95.4%)の平均点は、評論・小説の文章量の増加、小説の紛らわしい選択肢などから、前年より15.5点もダウンし、文・理系型の加重平均点を大幅に引き下げる要因の一つとなった。

前回の旧課程入試の始まった9年から、19年までの国語(9年~17年までは国語I・II)の平均点と受験者数の推移を下図に示した。

9年の国語I・II(旧課程時の国語の出題は、国語Iと国語I・IIの2科目。受験者数は圧倒的に国語I<国語I・II。)の平均点は70.1点(100点満点に換算。以下、同)と高得点であったが、翌10年には58.0点と大幅にダウンしている。

その後は、50点台のアップ・ダウンを繰り返してきた。15年に50.5点の最低点を記録した後、上昇傾向にあったが、旧課程入試最後の17年は59.8点で60点にはわずかに届かなかった。

新課程入試開始の18年は62.8点で9年に次ぐ高得点となったが、19年は再び50点台半ばまで急落した。



注1. 旧課程入試(9年~17年)は、国語及び国語の2科目出題。新課程入試(18年~)では、国語1科目のみの出題。

注2. 200点満点を100点満点に換算。

数学、数学Ⅰ・A、数学Ⅰ・Bとも、平均点大幅ダウン。

数学Ⅰ・Bは過去18年間で平均点5割以下が5回、平均点の変動幅也大。

数学は国公立大志願者にとって、文系志望者も含め必須教科だ。中でも数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bは英語、国語に次いで30万人超の受験者を擁し、文・理系型の基幹科目である。

そこで、セ試開始(2年)以降、19年までの18年間に於ける数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰを含む。以下、同)の最低点は11年の50.7点(旧・数学Ⅰの最低点も3年の50.7点)、最高点は12年の73.7点で、その較差は23.0点。

一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点は10年の41.4点、最高点は6年の77.2点で、その較差は35.8点。

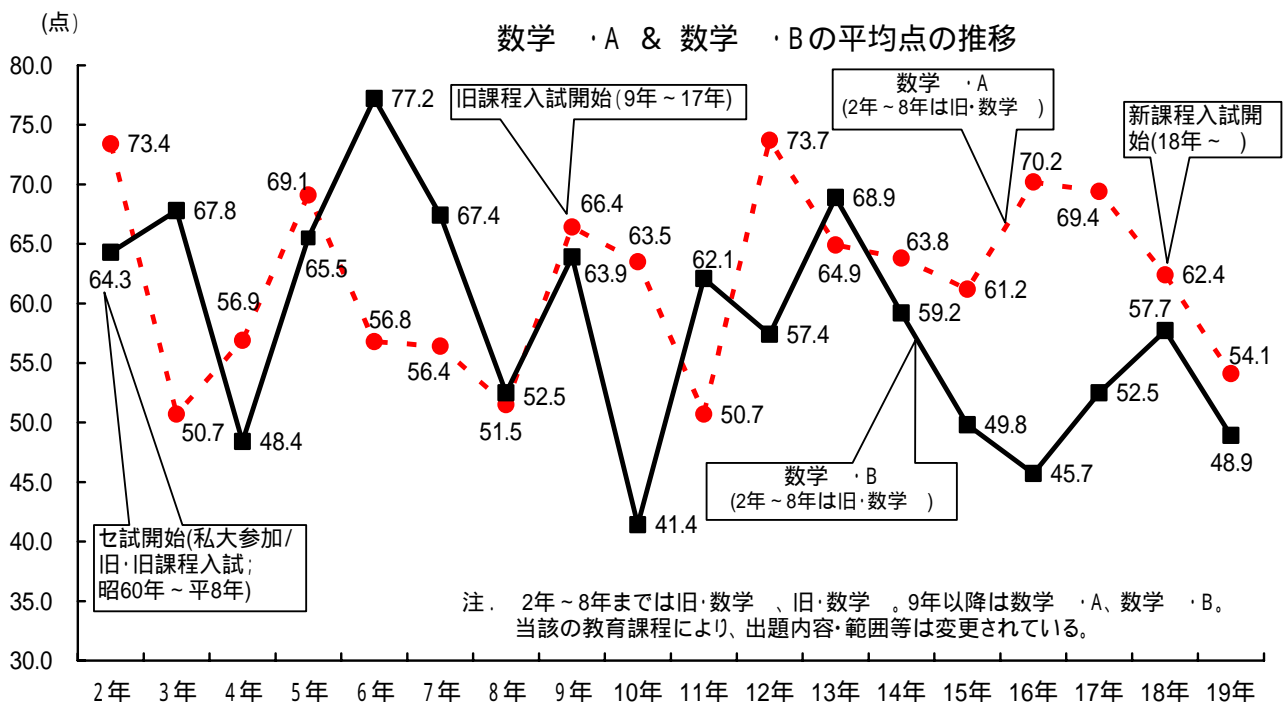
数学Ⅱ・Bの平均点は19年も含め、過去18年間で50点以下が5回もあるのに対し、数学Ⅰ・Aは1回もない。

数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bとの平均点を比べると、数学Ⅱ・Bは平均点の変動幅が大きく、50点以下の低得点も多い。

数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、難易や問題量などで今後ますます不安定な平均点を示すものとみられる。

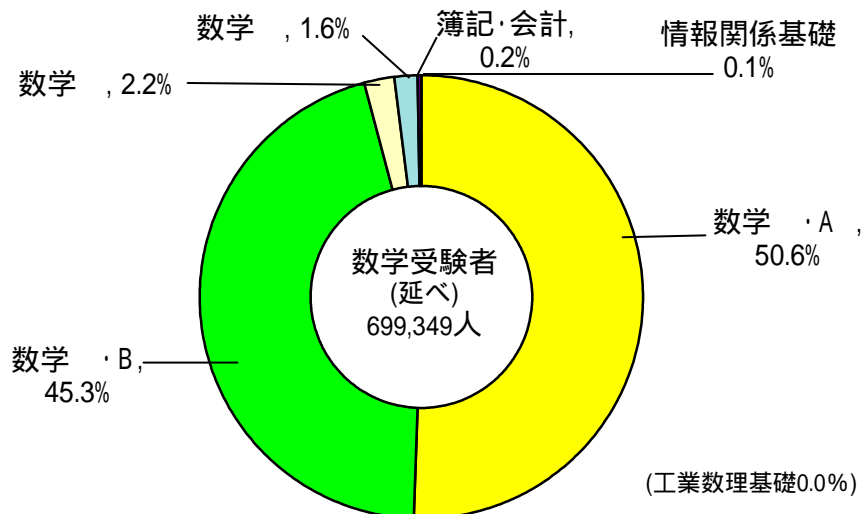
今回の“数学ショックは”、8年と10年に見られた2科目“ダブルダウン”による、数学大幅ダウンに酷似している。

◎ なお、数学Ⅰ・Aの「場合の数・確率」の問題は、セ試がスタートした2年の旧・数学Ⅱの追試験と設定が同じであった。セ試「数学」も“過去問活用”に踏み切ったのか、今後の展開が注目される。

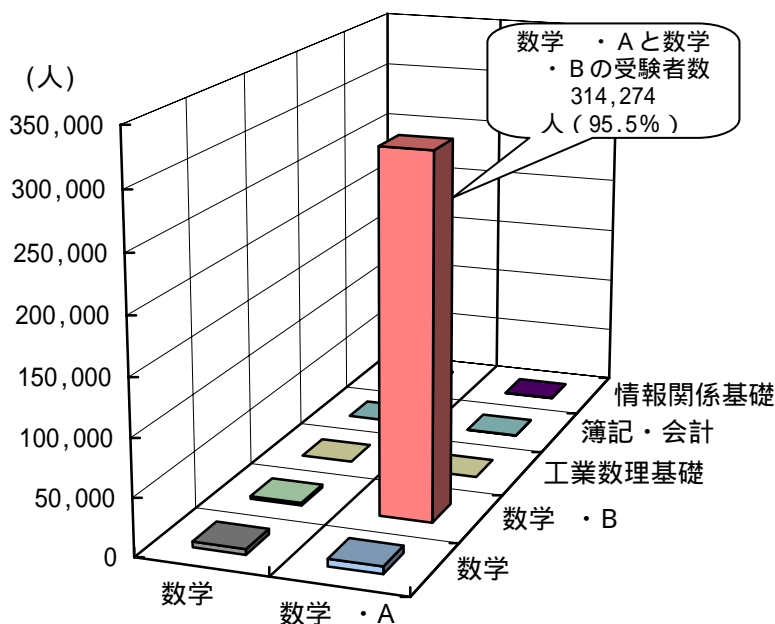


数学2科目受験は、数学・Aと数学・Bで約31万4,000人(95.5%)

数学延べ受験者の構成比(追・再試験含む)



数学2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



	数学	数学・B	工業数理基礎	簿記・会計	情報関係基礎
数学	4,910	2,402	24	268	83
数学・A	6,380	314,274	55	340	369

公民[現社]は2年連続平均点ダウン、受験者 1.3 万人(5.8%)減

9年に社会が地歴と公民に再編されて以降、国公立大の5教科6科目(地歴と公民から1科目)が主流であった時代は所謂“公民保険”として、「地歴・公民ダブル受験」の傾向が見られた。

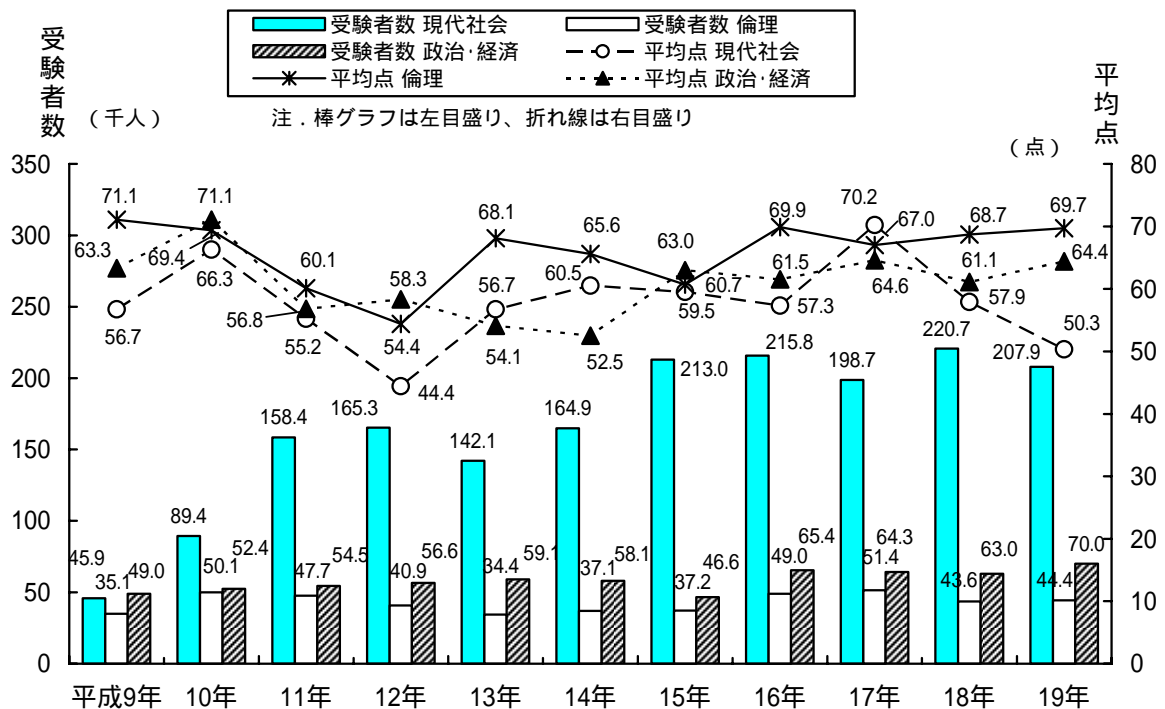
しかし、16年から本格化した国公立大文系の6教科7科目により、公民は文系標準型の“必須科目”となった。そのため、16年の公民は、史上最多の受験者数を記録した。17年はセ試全体の受験者減に伴い、公民の受験者も16年より約1万6,000人(4.8%)減った。

新課程となった18年から、公民の時間割はそれまでの2日目最終枠から第1日目の1時間目に移り、初日が文系科目でまとまった。18年はこうした時間割の変更に加え、前年の現代社会の高得点などから、軒並み受験者減となった教科の中で唯一、公民受験者は約1万3,000人(4.1%)増えた。

19年は前年の現代社会の大幅な平均点ダウンによって、現代社会の受験者が約1万2,800人(5.8%)減り、公民全体としても約4,900人(1.5%)減った。

公民各科目の受験者数の増・減は、当該科目の前年平均点のアップ・ダウンに影響されているようだ。16年に公民で唯一平均点アップした倫理は翌17年に受験者を5.1%増やし、18年は前年大幅な平均点アップ(+12.9点)した現代社会のみが約2万2,000人(11.1%)増えた。19年も前述のとおりで、現代社会にこうした傾向が色濃く現れた結果となった。

公民[現社・倫理・政経]の受験者数 & 平均点の推移(本試験)



11年までは現社の受験者数が毎年倍増。しかし、平均点は下降傾向で、12年は現社と倫理で史上最低となった。

14年は、前年に平均点が大幅アップした現社と倫理で受験者が増え、全体としても増加に転じた。

15年は、倫理と政経が前年の平均点ダウンから敬遠され、受験者数は、倫理が前年並み、政経が19.9%減となったものの、現社は前年より約4万8,000人(29.2%)増えた。

16年から公民は文系標準型の“必須科目”となり、16年の公民受験者は33万人超の史上最多となった。

●新課程となった18年はセ試時間割の変更と、前年平均点アップ、高得点の現社の受験者増で、各教科受験者減の中、唯一、公民受験者は増えた。

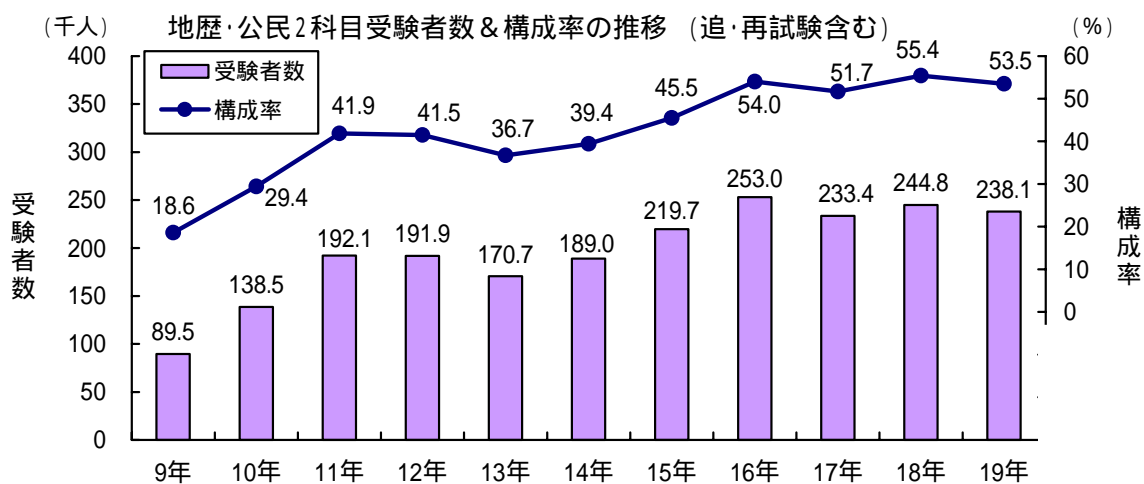
19年は、現社の前年平均点ダウンから受験者が約1万2,800人(5.8%)と大幅に減り、公民受験者の減少に繋がった。

地歴・公民; 2科目受験者が減少、構成率も1.9ポイントダウンの53.5%

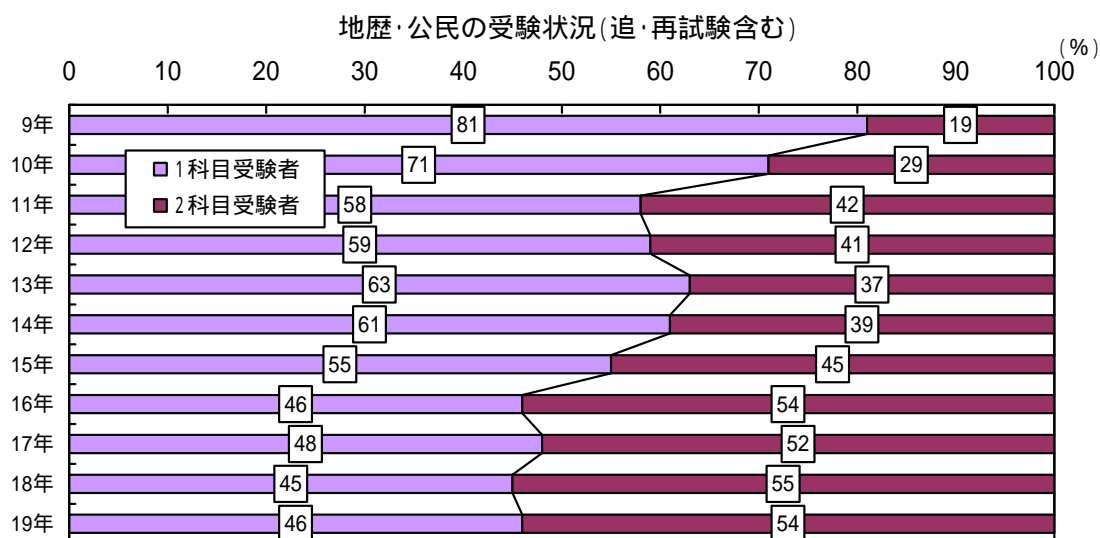
地歴・公民2科目受験は前述のように、「5教科6科目」（地歴・公民から1科目）時代においては、高得点を期待する“公民保険”による傾向が強く、11年までは2科目受験者数が激増した。16年は5(6)教科7科目化で、国立大の文系を中心に地歴・公民2科目必須となったため、2科目受験者は一気に増え、約25万3,000人の過去最多を記録。地歴・公民受験者に占める2科目受験者の割合（構成率）も初めて50%超となった。17年は、2科目必須の大学・学部は前年より増えたが、セ試全体の受験者減に加え、前年の公民平均点ダウン（倫理を除く）による“公民保険”組の減少などで、2科目受験者数、構成率とも前年を下回った。

18年は、時間割の変更で地歴と公民が第1日目の午前中にまとまったことなどで、2科目受験者数は前年より約1万1,000人(4.9%)増の約24万4,800人となり、地歴・公民受験者に占める割合も過去最高の55.4%に達した。

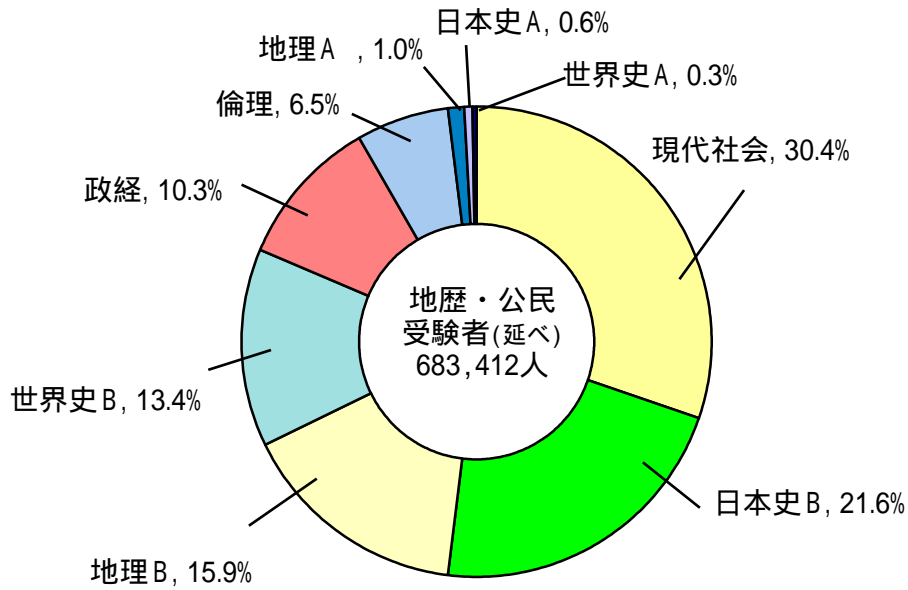
19年は、前年の現代社会の大幅な平均点ダウン(-12.9点)と50点台の得点(57.9点)から、理系志望者を中心に“公民保険”の意味合いが薄れ、2科目受験組が減少したとみられる。



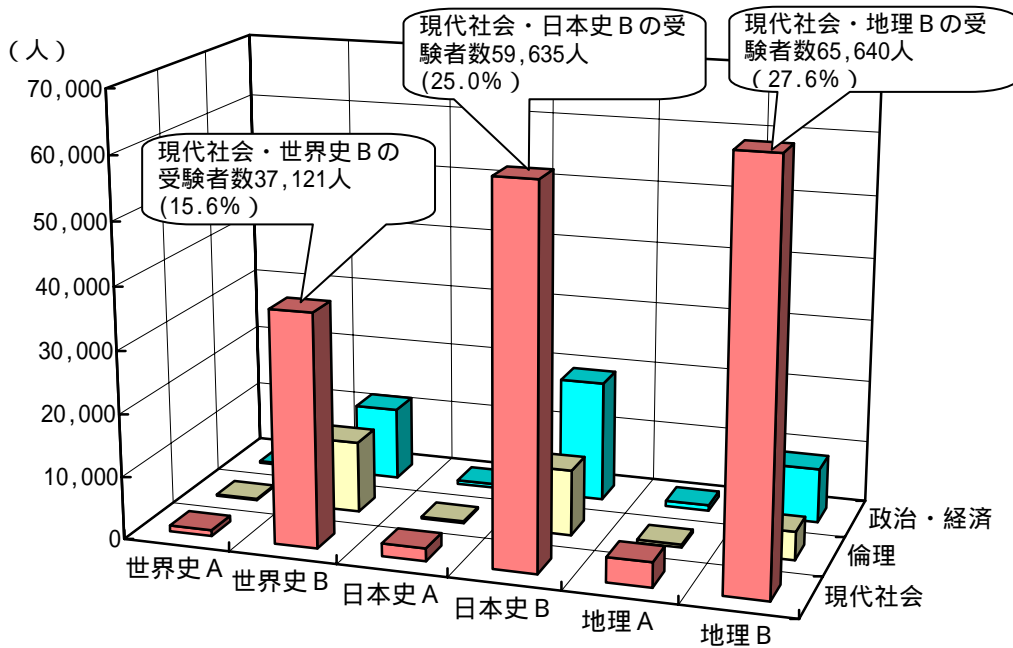
注: 「構成率」は、地歴または公民の実受験者数(1科目・2科目受験)に占める、2科目受験者数の割合。



地歴・公民延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)



地歴・公民の2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



	現代社会	倫理	政治・経済
世界史 A	942	198	283
世界史 B	37,121	11,414	11,602
日本史 A	2,035	295	604
日本史 B	59,635	10,460	19,346
地理 A	3,956	471	892
地理 B	65,640	4,503	8,707

理科; “理総保険”などで2科目受験者が増加し、実受験者減の中、延べ受験者増

受験生の理科離れや学力低下、履修科目の不揃いなどを背景に、理系を中心に理科2科目化が進み、9年以降、11年を除き、2科目受験者は17年まで毎年増加していた。特に、16年は5(6)教科7科目化により国立大理系を中心に2科目必須になったことに加え、試験枠が増えて3科目受験が可能になったことなどから、2(3)科目受験者数(3科目受験者含む。以下、同))は一気に増えて24万人超となり、理科受験者に占める2(3)科目受験者の割合(構成率)も62.6%に達した。17年は、理科2科目必須とする国公立大(学部)のさらなる増加に加え、総合理科を含む2(3)科目受験の増加により、2(3)科目受験者数は前年より約7,700人(3.2%)増の約24万8,700人の史上最多を記録し、受験者の構成率も67.2%に達した。

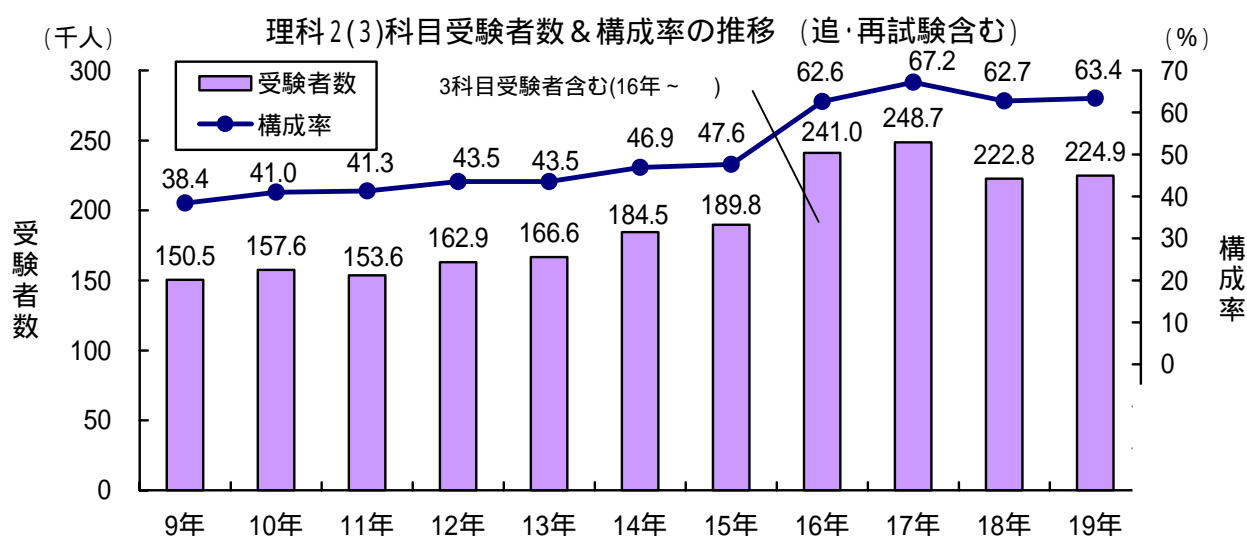
18年はセ試全体の受験者減や時間割の変更による試験枠の分断(17年までは、第1日目の後半に3コマ連続)などの影響で、理科の実受験者数は前年より約1万5,000人(4.1%)少ない約35万5,200人であった。国公立大における理科2科目必須の増加や医学部(医学科)での3科目必須(5大学5学部)もみられたが、理科2(3)科目受験者数は前年より約2万5,900人(10.4%)減の約22万2,800人で、構成率も前年より4.5ポイントダウンの62.7%だった。

19年は、理科全体の実受験者数は前年より若干減り、約35万4,800人だが、各科目の受験者数は増えている。これは、2科目受験者(実受験者)が約2,400人(1.2%)増えたため、全体の延べ受験者数は約1,500人(0.3%)増の約60万7,100人だった。2(3)科目受験者の割合も、前年より0.7ポイントアップの63.4%に達した。

<理科総合A、Bの“理総保険”>

理科総合A(物理・化学分野)と理科総合B(生物・地学分野)は、旧・総合理科に替わって高得点を期待する“理総保険”として引き継がれ、19年は理科総合Aで約3,600人、理科総合Bで約2,000人増えている。

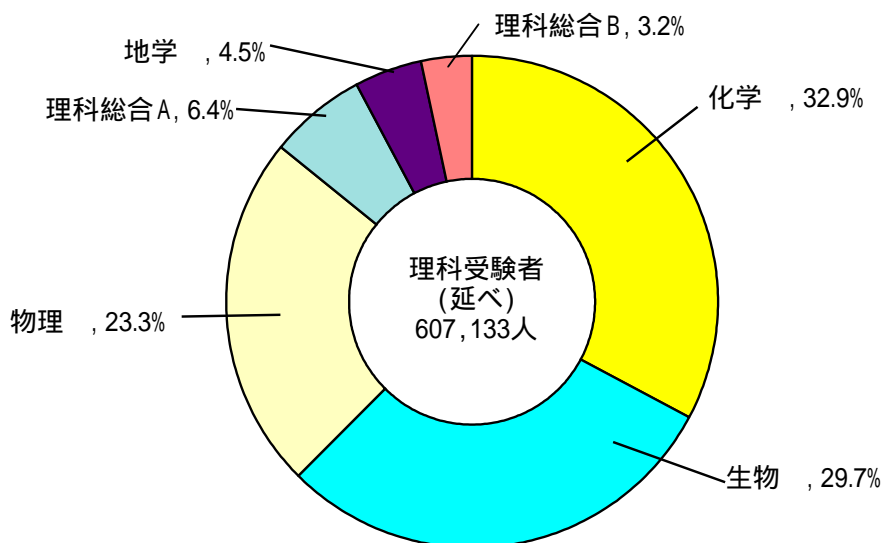
因みに、「生物I+理科総合A」は約3,200人(14.9%)増、「物理I+化学I+理科総合B」は約970人(18.9%)増となっている。



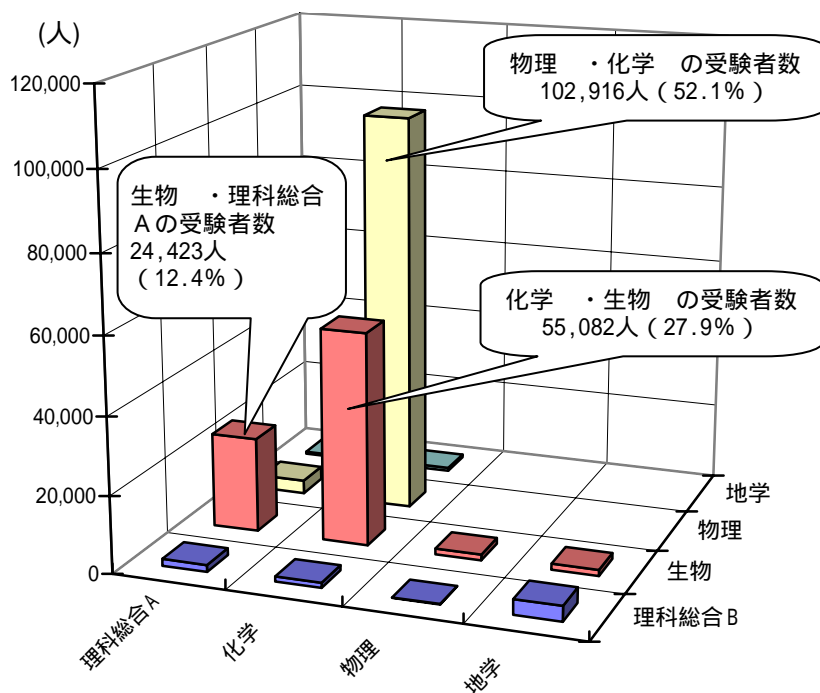
注1. 16年以降は理科3科目受験も含む(16年から3科目受験が可能)。

注2. 「構成率」は、理科の実受験者数(1・2・3科目受験)に占める、2科目受験者数(3科目受験も含む)の割合。

理科延べ受験者の構成比率(追・再試験含む)

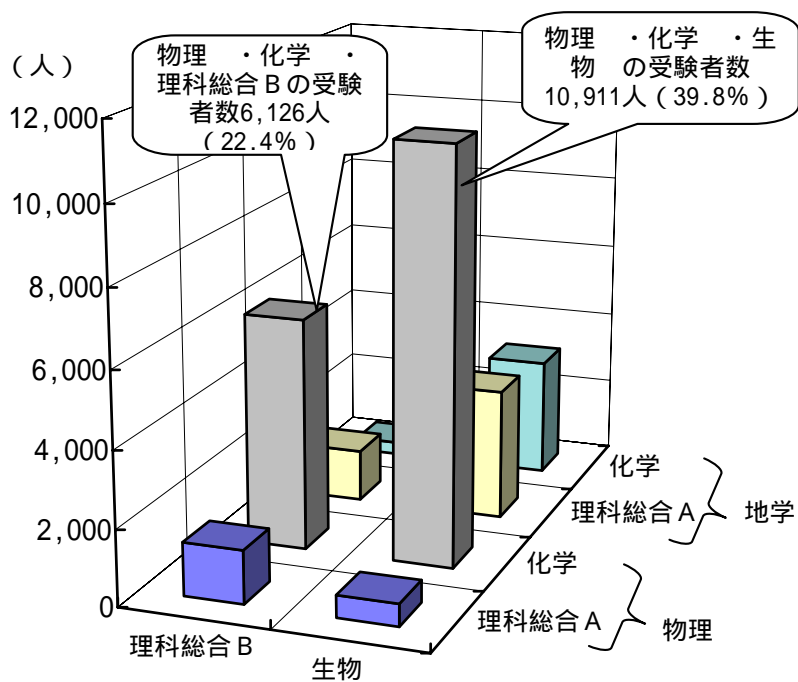


理科2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



	理科総合A	化学	物理	地学
理科総合B	1,784	1,345	119	3,930
生物	24,423	55,082	1,528	1,536
物理	3,465	102,916		
地学	578	810		

理科 3 科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



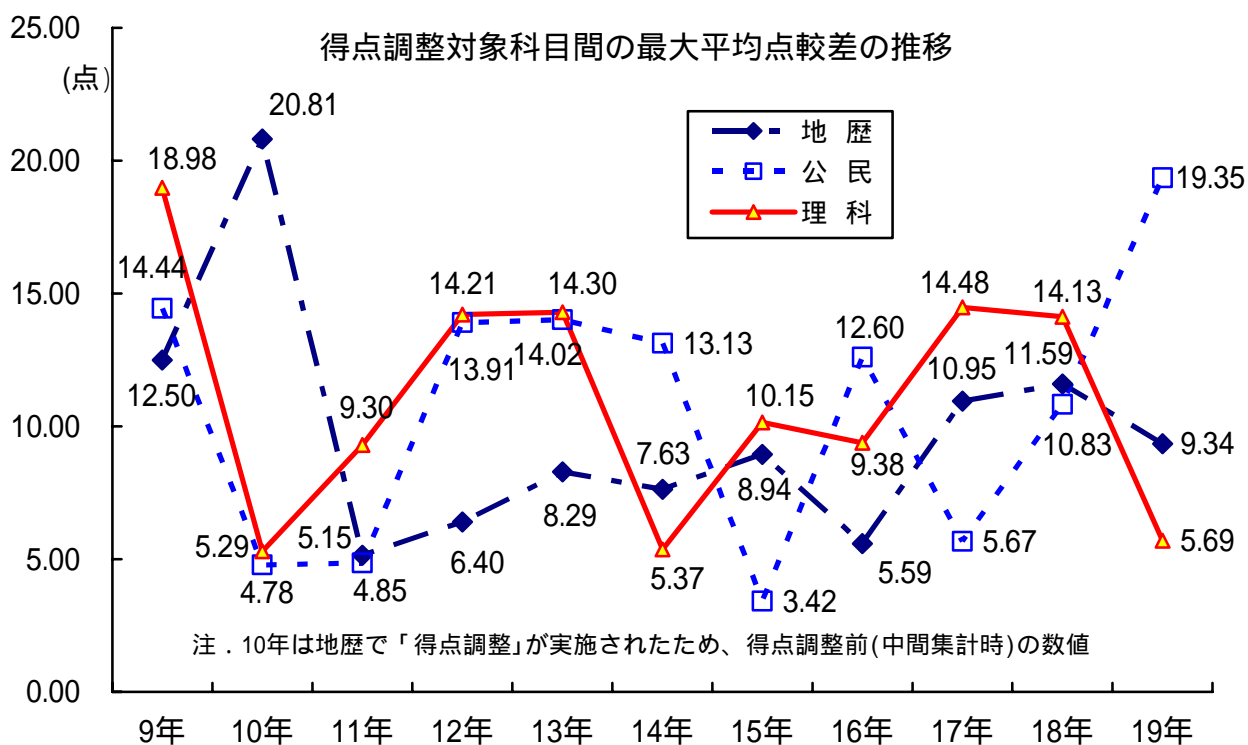
理科		物理		地学	
理科		理科総合 A	化学	理科総合 A	化学
理科	理科総合 B	1,402	6,126	1,379	341
	生物	584	10,911	3,485	3,162

得点調整; 平均点較差「倫理 - 現社 = 19.35 点」で、かろうじてクリア

セ試の選択科目間における大幅な平均点差に対しては、「得点調整」が実施される場合がある。得点調整は、「地歴のB科目間、公民の各科目間、及び理科の各<科目>間で、原則として20点以上の平均点差が生じ、これが試験問題の難易差に基づくものと認められる」と、実施される。

下図は9年以降の得点調整対象科目間の最大平均点差の推移を示したものである。

19年の得点調整対象科目間の平均点差をみると、地歴; 世界史B - 地理B = 9.34点、公民; 倫理 - 現代社会 = 19.35点、理科: 生物I - 化学I = 5.69点で、公民がかろうじてガイドラインの20点以内に収まり、得点調整は実施されなかった。



< 得点調整の実施 >

- これまでの得点調整実施の有無をみると、10年は地理Bと日本史Bとの平均点差(地理B > 日本史B)が20点以上(中間集計時点)となったため、世界史Bも加えた地歴3科目間で得点調整が実施された。
- グラフにはないが、共通1次時代(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)の平成元(1989)年にも理科で実施(物理・生物の得点を修正)された経緯がある。

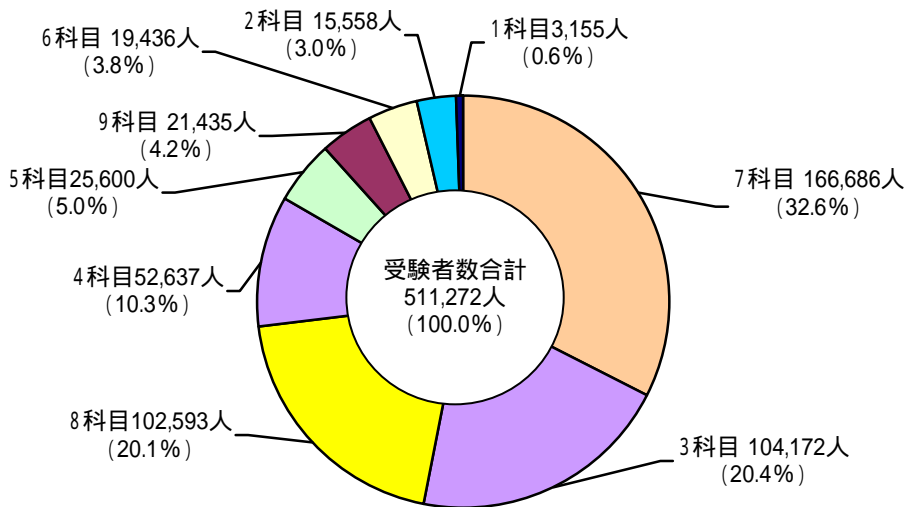
注) 旧課程入試(9年~17年)の得点調整対象科目は、地歴と理科のB科目間、及び公民の各科目間。

受験科目数別の受験状況；私立大型の「3科目以下」受験が増加

国公立大のセ試科目は15年まで「5教科6科目」を主体としていたが、16年からほとんどの国立大が「5教科7科目以上」となった。そのため、16年以降、「7～9科目」受験が急増し、高い受験率を示している。19年はやや低下したが、「7科目」受験に限れば約3,500人(2.1%)増え、受験率も0.4ポイントアップの32.6%で、全体の約1/3を占めている。

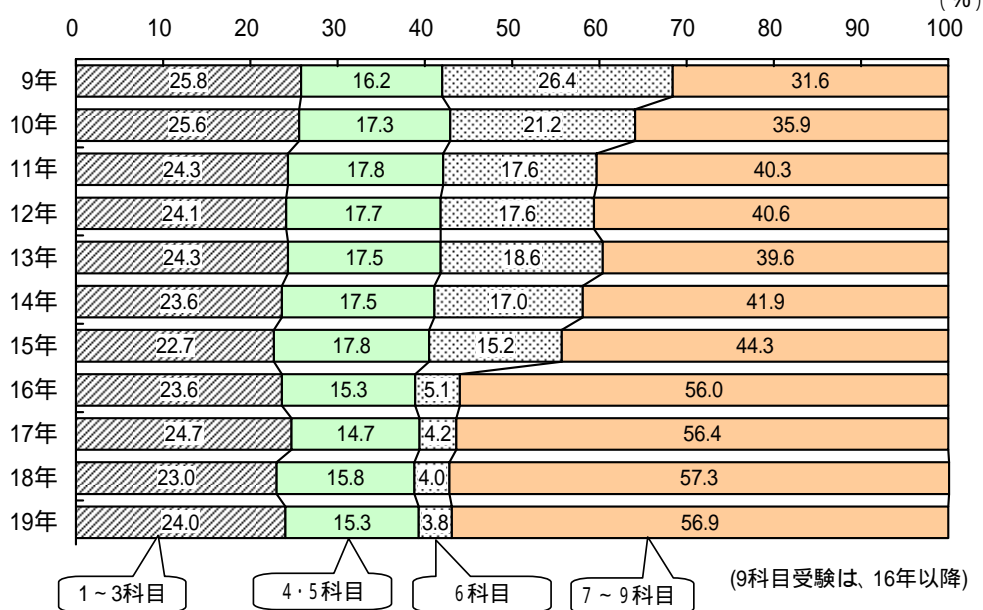
他方、私立大のセ試利用入試は国公立大との併願の多い一部の有力大を除き、大半は2、3科目である。「1～3科目」の受験状況を見ると、19年は受験者で約7,000人(6.0%)増え、受験率も0.1ポイントアップの24.0%となり、私立大型セ試受験の拡大がうかがえる。

19年センター試験 / 受験科目数別受験者数



注.()内は受験者数合計に対する当該科目受験者数の割合。

センター試験 / 受験科目数別受験率の推移



注. 受験率は、受験者数合計に対する当該科目受験者数の割合。